特71
654

特71
654

宮山圖書館
53.4.18
圖書館藏書

やまと昭君自序

思はぬ人に思はれて、破鏡かさねて照らさぬ。ちる花のまたとは枝に歸らぬ娘。一葉がはかなき身とむあしによそへつゝ、扨「やまと昭君」と題す。此物語は原「あらびあん ないと」に見えたる、THE HUSBAND AND THE PARROT.（夫と鸚鵡）の作意を飜案せしに、稿成ての後、馬琴翁が盆石皿山記を見れば、是とよくも似たる脚色あり。先人すでにかく物したまへるからに、毛延壽が姿繪より、おをあれの醜かるべし。面縲さむも羞かはしと、古筐の底に陰れ、滿面の胡沙に淺ましく裹え果、うき年月を過しける。このほど手細工の（京人形）その土いまだ乾ざるに、艶あるものにおきやゝ問はれ、ふしといはん事の口惜く、これをやうゝ嚇して世に出さしむ。漢宮のむかし風俗をその儘、時世粧をも辨へも。且今世に媚ぶる色も失ておければ、なか〳〵人と寵を爭はむとふはあらで、たゞ

78W15775

をつうしの人々ゝ逢ふ事の嬉しさよ。

ことし七夕再校　紅葉山人

やまと昭君

紅葉山人著

壹の巻　花にもまさる一葉

戀慕。これの影とおりて離れぬものゝ疑念なり。戀慕が募れば募る疑念。つまりゝ「戀ふ」とゝ「思ふ」ゝして、「疑ふ」とゝ「思ひ過ま」に外ならざれば、戀のきむる勝ゝ、疑念の雲ゝおきゝ極まれり。いよ〳〵これが高じて、嫉妬となるときゝ恐ろし犯事多し。一時鳴るゝ歸らぬ夫。今頃ゝ誰さす盃ゝ醉ふて、誰膝枕ゝうつゝをぬかしてかと……此時はまだ疑念ばかりなれど、二時過ぎてやう〳〵玄關に轟く車の音――わざと出迎へぞ。ほろ醉の旦那ゝ千鳥足をふみしめ、ふだらおき帶を解かけて（寢衣を……）といふ顔をジロリ。少し鼻をつま

らせて（どなたかに着せて私貰ひ遊ばしまし）　此時にて嫉妬。いかゝも「もしたなき」やうなまど、其身ゝなりては、これはかりゝて言足るべきゝあらず。「やき持」とたゞ一口ゝいひ消す奴に死で見よ——犬ゝ喰はれてしまふ。身に替て夫を思へばなれ。思はざれば無孔笛ゝ音色あるはづなし。きまば加減しあるる嫉妬は、夫婦の中にはあるべき事にして、露ほどもこの心なき女は、心底知れずして恐ろしとは、無好でもいひのこせしか、戀知らぬもの、句にあらず……なれどこれも過ていうるさく——いやらしく、七去の嚴則ゝ明文ありて、婦人丹此を誡むるはよけれど、男の修身ゝは打捨て、構はざるこそ不審なれ。嫉妬ゆゑゝ一命お及びし婦の例は、昔より數の語草ありて珍らしからねど、男のこれゆゑに大事を引起せしと見れば、謹まむこと、おおかち婦人のみおい限るべからず。

其の縁に卯木平馬とて譜代の家老職。主君の御覺も目出たき武士。今年五十の

坂に近く、雪之助行年十八歳の子息を持ちながら、幾歳になりても已ぬは是。家中に陰れなき好色者。足輕風情の女房娘、其は論なし。女といふ女は、垣間見ぜといふことあれば、一落舉つて武藏殿と仇名し、これが今の師直。　去年の末命から二ツ目の妻を、病氣に横取きれ、淋しき閨は一ツ枕。物足ぬ心深く、美色あらば妾にもと思へど、流石に我子の前をかね、家中に後妻を求むれど、我娘をと名乘出るものなし。　愛に同じ藩士の娘に(一葉)とて國を傾くる艶顔。こゝし十九の花盛り。大振袖の八口を、紫の組にて留めたる異樣は物數寄。其いはれを聞けば――日に何度といふ數を知らぎ、人に引かるゝ、袖のちぎれぬためとてなり。　また或時はいきぬけ底なしの、袂をつけし衣をきたりしは、附文のこれに溜らぬやうにとは……うそらしけれども、この藩士の物語。半分は聞ても娘の容色思ひやるべし。　其頃士分の娘が嗜の業、何をこれといふ不足なく、取はけ琴は八橋撿校の秘曲を傳へて、花の宴月の宴、よし風が吹いて

も、雲が出ても、此爪音をくてゝとの難有き御詞。手跡ゝ瀧本の流をくみて、ちらし書の麗ゝしき。　書捨の反古さへ手にいれる若侍ゝ、此を元結にして、ゆかしがりける。　姿を聞くものゝ五分の戀に亂れ、しきゝに拝し參らせてゝ（君の御馬前）まで預り物の一命を、用捨もなくこが物にして、そもゝ樣の庭草の露にも消をむと、無分別に惱ます心、幾個とも數へ難し。　この眉目にしてゝかも、性質までやさしければ、柳の枝に梅の香がをる花櫻と、御臺樣ひとしほ御目をかけたまひ、十四のら御殿の奉公。身柄ゝさまでこあらねど、近衆出頭の御寵愛。それで朋輩の妬忌をうけぬとゝ、何樣この御化身こや。闇で見たらば御光が見えさうおもの。　またこ一ツの不思議ゝ、かゝる美人でありなが ら、この歳に至るまで汚されぬ。十九の春をむざを過さして、あつたゝあの振袖枕の、移香かぐ男はなきかと、人々にいらざる苦勞をさせるにつけても、女ゝ罪なものなり。

人知らぬこそおかしけれ。いつも與女中の物語にある若侍――浦波田鶴彌がいつしか思を……うけつ懸られつ、危き首尾を樂み。二人ともこれが戀乃初峯入、路ならぬ路に迷ひ。露顯の曉ゝ、一ツ席に半座をわけ、一ツ刀の血にならむと、命をおきものゝしての逢瀬。もとより此戀ならざりしかちべ、いつまゝ焦れ死――思ひ死にすつる命。今本望この樣に遂ぐての上なれば、一夜おりと枕を双べしをこぼれ幸にして、その覺悟ゝかねてあり。　逢ふ度ごとに未來を語り、別れ盃をくみ、さゝ今日や明日やと、西方へ引移りての新世帶をいそぐ……不便。　庭先のこの貴妃櫻。いかて平馬の詠めを洩るべき。深く思ひ籠みて、はや實きへも結ぶべきを、それと心附かねば、散ぬち間にと氣をいらち、一葉の親元に談じかけて見れば、いやとゝ言きぬ家老の所望。親子ほど違ふ年――家中の思ゝくもはづかしと、額を突合せて一夜の談合。その結句ゝ（これが目掛手掛といふでゝなし）親父が榮利に良心と曇らせて斯く言へば（御家老職の與

方）　張る馬に一鞭母親の言葉。大金とよき嫁に、持主お愛心きする物といへり。善に急げ――わが嫁に死を急げ――この由御臺様へ申上げ、首尾よく下されし御暇と數々の小袖。つゝむふあまる兩親の喜悦。引替て一葉の不機嫌。すこし涙聲になりて、御臺様の御暇に取つき（お慈悲にこの暮まで……）お主も不便に思はれて（親共があれゐどよいへば、一先宿へ下り、折もあらば遊びがてら、機嫌見に来や）　とのお言葉。一葉は身を震はし、とり附し手を放きぬを、やうやく宿へ連歸ると其儘（何の用で……）　言はせも果てず左右から二ツの口を揃え、まか〳〵のよしを語れば、忽に紅い花が咲た話ほども承知せず、（お國元の伯母さんが長々の御病氣、このほどに一層むづかしいとのお話、もしやおくなり遊ばしましたのか）　と思ひもつかぬ事を言ふ。母親いもどかしく（嘘でない証據は……）と奥の一間へ連てゆき（是をみやれ）見れば、夢かやまぼろしかや。夢でもなくまぼろしでもなく、疑ひもお！我家の

與に、所せきまで押並べたる結納の品々。一葉に驚死易に疑心と轟めせ　（真實か）　と問へば（おう……おう）　と人の氣も知らぬ笑顔。母親ながら……勿体なけれど、心底惡らしく、おそる〳〵睨めつけ　（一生私はお嫁入に否で御座りまを）　もねちらして母の手に乘らぜ。親父に立腹の眼を血走らせ（親に背く不孝者。否とあらばたつてといに言はぬ。其處へ直れ。手打にする）「ギラリ」光る物を抜放せば「詫るか」「遁るか」。二ツの内と思ひの外。詫もせず――遁もせぜ。其場に直ワて少ともるぴれず　（不孝の罪にあの世からお詫を……）　と髪の後毛を静かに掻上げ、象牙の様に美くしい頸をきしのむし、眼を塞ぎて唇の動くに、南無阿彌陀佛を唱ふるのか。

親父に振上し白刃のやり場を失ひ（さらば）と一際聲を張上げ、兩肌寛げる有様……母に其手にもがり涙聲。一葉も仰天して（何ゆゑ……）　と抱たつけば（御家老に申譯立ねば切腹して……）　と日頃無藝の親父が一ト狂言。一葉も今

は是非なく(あい)　とはッきりした返事はせねど、流石は(いや)ともいひねて、其晩は泣寐入。　翌のす、まぬ体を見て、事の起らぬ内と、その翌晩が四海波……靜ならぬは一葉が胸。聯く間の事をれば、田鶴彌に逢ひてこの趣を語るもおらぜ。祝言の前の夜ふ、家内の寢息を伺ひ、この始末を一筆ためし參らすも、涙に摺る墨――無念ふ齒む筆。花にも鳥ふもすら〳〵と歌を聯ぬる身が、とり亂しては前後不覺の文言。三尺あまりの卷紙はわづら胸三寸の萬分一を籠めて、これを遺物にしていたはしや一葉。王昭君の怨を呑むてゆく先は……

……霜白く、草葉黄るる千里の遠きにあらで、裏の肱懸窓から、つゐ向ふは見ゆる黒塀がそれなり。

祝言の其夜から、今ふ三月餘り、寢ぬれても下紐をゆるめし事かつてなく、ならべる枕も其人に逢ひし夢さめくは。羞かしく。夜はこの通り。晝は打解るし言葉をだにかはさぜ。　つれなたやうに――館かれるやうにと振舞へど、平馬の戀はいつかなさめぜ。一葉が此處は來てからは、髮さへ心ふ留めぜ、ましく紅白粉の顔見せし事なし。黛眉は手傳をといはぬばかりに、平馬はそまく機嫌をとれど、鏡はだはむかはぜ。衣類は綺麗と好まされど、平馬が心を竭せし染摸樣も、長持はあたら夜れ錦と朽れぬ。

これでも堪忍して、今や解くると、春の氷はうれしき風をまてど、百日を一日、はいらぬ一葉の素振。ありとは見えく逢はぬ君は、おもしろからぬ日を送りける。　いあは迷へばとく、假寢の手枕さへゆるさぬ人ふ、あれらはまたゆるされぬ心。おぢが人目を忍ぶ戀といふてはおし。偕老といふ吾妻――吾持物。それの自由ふならぬといふ事……一定子細あるは極まる。性來狐疑深き平馬おぢは、一日はおろら片時も暇あれば、一葉の傍を離れぜっわが出仕の留守は家來婢女に含めて、護花鈴嚴しく、かれに翼ありとも無益、鳥一羽だは近よるべたにあらぜ。鴈の音信、これとくも覺束なし。

去程に昨日の主命。明朝早天より御鷹狩の御供仰せつけられ、二日泊といは憎ふ

されど、これはかりは辭退しがたく、何くれと用意せはしき中にも、二日の留守に心引され、用事に手につかぬ、茫然と一間に閉籠り、胸の色に顔に見れば、食事までも、まぬと聞傳へて――此度の狩ふい、日頃無慈悲を御家老の鍵も、よもや妻乞ふ鹿ふにたつまいと、とり〳〵の陰言。此を聞こみし出入の鳥屋、善助御機嫌伺ひとて此日の午後。

二の巻

善助の口と禍の門

（善助が御機嫌うるはしう參りました）

色白な桂といふ侍女が、うく與へ申上れば

（是へ）　との言葉。ほどなく善助居間の外に兩手をつかへ

（へイこれは殿様御機嫌よろしう……）

平馬は脇息に片肱をかけおがら

（おう善助か。よい處へ參った。徒然の折ぬらぢや、一石どうぢや）

善助は首を少し傾け、小鬢を掻きながら

（へ。へ。此頃はなに〳〵もちまして、手前どもはお合手になりかねまする。先達てのお手なみには、どうもはや恐れいりました）

（はゝゝゝ）　さもきうづと言はぬばかり沙高笑ひ。

（こりやもそっと近う）　御意の下に善助は、疊一枚ほどふぢりいる時、摺足の音して茶煙草盆を運ぶお桂の、やがて出て行より

（時に殿様與様は……）

（この兩三日氣分が惡いと申して伏つて居る）

聞くと顰を顰めて

（へエそれは。お癪氣で居らつしやいますか）

（大方左様な事であらうが、只氣分があるいとばかり申して醫者にもかゝらせ食事もあまり致さんでと伏つて居るので困る）

（それはどうも……定めし御心配で居らつしやいませう。一体が花車をお生つれでお出遊ばしますうち、お風も召やすいやうをわけで……お大事に遊ばしまし。おかし殿様お樂お事で居らつしやいませう、あゝいふお若いお美しいお方を奥様に……）

平馬は苦笑ひをして

（馬鹿を申すな）

（馬鹿を申すを）

と襖の陰で誰やらいふ聲に、平馬は其方に目を配り

（誰ぢや）　少し張あげし調子み聲をかけ是ば

（誰ぢや）

また同じ様にいひ返され狩癖の目背を釣つて、

（善助見て參れ）

善助は獨おかしきをかくし、かしこまつて座を立ち、襖の陰より持こむ鳥籠。その中に羽たくは、御覧ぜよ鸚鵡まり。平馬の前へ是を押直して、

（これで御座ります）

（何……是ぢや）

籠の中を透し見て、

（鸚鵡か）

（御意にござります）

（御意ふ御座りまを）　鳥がまたまねるゐ、

（はゝゝゝ）

平馬は膝を拍て笑ひ

（是はよい慰ぢや。子が求めてとらさう。うム何程ぢや）

得さりや應。此處ぞと善助すこし膝をゝめ、

《これは和蘭陀種で、尋常の鸚鵡では口真似と申しましても、今人れ申すことをすぐそばから真似ると申すまでは參りません。教へただけの事でございますが、これはおか〳〵そんなものでは御座いません。只今の通り何でもすぐ傍から真似をする。其外……こゝが和蘭陀種で……一日中聞きました事はのこらず覚えて、夜になりますると、すつかりそれを饒舌まもる》

《うゥむ》

《それと申しまするも、この親鳥と申すのが神通を得ましたもので、これはほさ見たことをもち〳〵饒舌りましたさうで……》

《ふゥむ……てを》

《それはつきまして面白いお話が御座いまま》

と子細らしく說出をを聞けば、

日本の地をおちらへ去ること二萬三千里。御案内様の和蘭陀の都。はキヤピタンに――かやうな處にかつて聞たことなし。たゞ善助が話すまゝをせて――親指が人さし指に數へらる、大分限者にて、何かこ問屋の主人が、大金に代てこの親鳥の鸚鵡を飼ひし。

此家にゝ手掛りの四五人もありて、その中新參の一人ゝ、花櫻昨日からといふ年頃。身柄はこんな奉公せどもをれど、借財の抵當にしたが親父一生の落度。返濟の期限と共に親子の縁きれて、此處に別とられ。あるゞれ寵愛夜を重ねれば、あまる手掛ども秘死胸の火焔たえぢ。いかこしても此女をたゝき出きずは、流行の小袖一枚死ることさへまゝならずと、恐ろし死說計數をつくせし中に、此女餘所に陰し男あり。約束の曉ありて忍びあふのよし。おき事をふるれば、主人の耳もをおしこれに傾きて、もとより我ゐ靡きたるにあらぢ、金と枕を替はす氣の女。左樣な事もあるべしとの疑念起きば、晝夜身も心もうの傍をさらず、庭のうゝろあるきにも自分からおしかけて、鶯鳥のやうにして暮しける。

帝王もら心まかせにならぬもの三ツあり。富貴自在なれど、商人の身の用事は是非なく、一日一夜留守為せねばならぬこと出来て、こんな時のこの鸚鵡と、その籠を妾の部屋へ飾りて、大事の鳥なればよく氣をつけてと、朝まだき出てゆきし其晩は、氣のつまるものおし。久しぶりの今夜と、下婢どもは一處に集りて、おもしろさうなる話聲。此女も其處をゆきて、主從なしの浮世物語。　その中に年寄たる女のいふは。いつぞやれた坐敷にて、旦那様の居ぬ間に、花活を倒して少し緣をかいたを、誰知るまいと思のほか、とくに御存じにて、目の焼けるわどお小言をたべた。誰ぞいひつけ口をする人があるを、意味あり氣な目をして、座中を見まはせば、十五六の小女が口を尖らし、またしも此間、旦那様のお居間を掃除いたした折、つゐ粗相してれ硯箱の蓋に疵をつけたを、誰一人知るはづはないに、涙の出るわど叱られました。誰方ぞい知らねど、朋友がひのをいあんまりなといふ。扨そのつぎは我も秘も、似たことをいひあひ不審とたつれば、一人の仲働、そまにみんなあの鳥の告口をいふふ、妾までがくやしがり、旦那様がわたしの部屋へ今日に限つてあの鳥と置かれたのも、留守の様子をしらうとの御了簡、思へば小づらの憎い鳥め。

（あなたがうしておやり遊ばせまし）

と入智恵する女のきしづふまかせ。まづ鳥籠を縁に出し、其上ふ雨戸を駸し、障子の影に石白を据え、籠をそこし離まし處に鏡を立かる。やがて如露にて戸の上へ水を撒けば、透間もなき雫の音、盆を覆へまり立のやうなり。相圖にこゝと四五人がゝりて、から白を挽まいせば、雲あらざるに殿々たる雷鳴。蠟燭四五挺を ぼしく、動かも鏡に映せば、電火閃きとしてさながらの大雷雨。　鸚鵡もこれにに誑かられく。羽翼を収め首を縮め、恐れ慄れて、籠の隅に蹲るを、見るより女共手を拍てどつとうちひ、日頃の仇思ひ知つたかと、籠を叩いてあめれば、夜更るまでかうして戯れ、あくまは朝霧に濡れて戻つて来る主人、可愛の妾の顔よりは、あふむの言葉が氣にかゝり、籠をわが部屋へとりよせて様子を聞けば――昨

夜い大雷雨。　愚かや門外を見よ。雨一雫ふりたる模様にさし。扨てかの女がこれを欺き、不義を遂ずしゴ極まれり（惡くき奴め用捨がおらぬか）　手文庫れ内より短銃つかみ出し、一散に妾の部屋へかけいり、物をもいはせぬ、雪のやうな胸元へ、あらけなくも筒口押當、火蓋を切れば、湧あがる烟より早く命は消えぬ。

（と中は次第で御座ります）

虛實九分一分にとりまじへ、平馬が今の思ひ丹切箱めて物語ると、其とに心づかず。今さいたばかり前車の戒遠からざるを、女に魂を奪れて孔恩案、大叔二十金を出てし災を買ふ。　花い櫻、人は武士れ……數のおかみい、こんなうつけものも御座るてや。

三の巻　他所の雨に濡衣

夫い一昨日立ちて、其夜と昨夜の通ひ路――夢なれど人目もおく、誰ゐ心置なくあり〳〵と首尾して、後朝の別ゴ袖をひたすと覺えゴ覺むれば、庭の芙蓉ゴおく露いつより滋く、朝風身ゐ答へて、其まゴ、氣色すぐれぢ、臥戸から手水を呼ぶも鼻辨なり。　朝御膳に手ゐ就かぢ下がれば、勝手にい「末」が

（お桂さん與樣の御機嫌は）

（今朝はいつになく大層お顏色がれゴるいよ）

（あなたはお顏色が大層よろしいて御座いませんか）

笑を帶びるやうな――意味あるやうな眼ゴ、ジッぢ見詰れれば、れ桂に電の角を中指で撫おがら

（おや何故）

（今ゴゴかりまをから、まアれ巻ゴさい、あれ袂が灰へ……まるで夢中ゴ、、、）

（何だねエお末さん、何を事だか聞かして下さいヨ）

（お著ンをすつたら）

（何でも著りまを）　　末は布巾を絞りながら

（今ね……）

（エア）

（今ね……）

（はア）

（今ね……）

（わたしやいやよ）

痛くない五分試しに、少しぢれて細い眉をしかめれば。末は笑ひながら

（先刻あら三度ある方が此處へいらしつてね、桂は何處へいつた）

言葉の了らぬ中に、紅める顔を横に向ければ、お末はわざと、

（れ桂さん）

呼ばれてもどうも顔を向けられず。此度お末が例のひやかす眼で、自分を見詰て待かまへ、見合たら笑ふ下心。まさと事と思へば。　其を羞かしがつて返事をせぬと、是も知ぬいく居ながら、また呼らる。

（お桂さん）

居さゝまさぢ、足早に二足ばかり遁く行くを、

（憚　さま、これを與へ……）

聲をかゝられ、與へ何の持て行く物てもと、羞かしいながら引還して、

（何を……）　　近寄れば末にるが額へ指を當て、

（此處ンとこへ墨がちよいと……）

（虚言）

（ぢやア鏡を御覽なさいな）

それほどにいふゆゑ、懐中の「てこせこ」に手をうける時。

（ちいよと顔をあおて御覧おさいまし）

言葉ゴつまて顔を上れば、

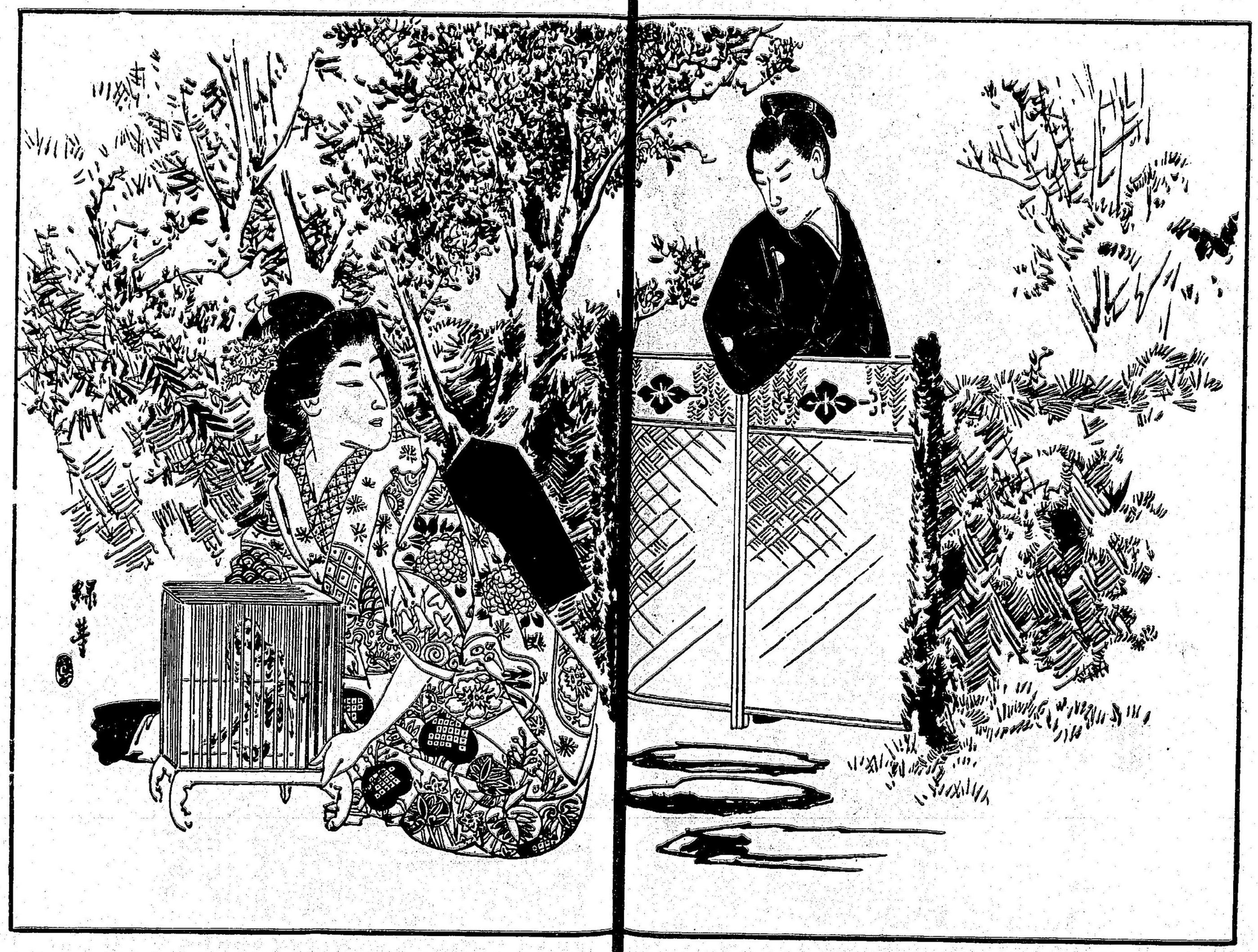
（それ嬉しいと書て御座いまをおゝ、ゝ、ゝ）

散々ゴ玩弄られ、（惡らしい）とも言いず。末をシロリ見ぬふりの上目づかひして、逃て行く後で

（簪が落ました）

といふ聲聞えたれば、髪へ手を上げ、また虚言をを思ひながら、書院の方へ姿は見えをなりぬ。

庭の檜垣の陰、遣水の落くゆく處ふ、縁から見れば後姿ふかゞみ、紫縮緬の紐襷を右肩へをだらなく綾どり、長き袂を挿みおき、「玉をむいた」やうな二の腕を惜氣おく暴らし、小盥を扣て鸚鵡が籠を洗ふお桂の後ふ、一尺ばかり離きて雪之助の立姿。五所紋の淡黄羽二重の袷ふ、献上博多のはさみ帯、鞘巻裝の脇差を柄



深く手挿み、白と薄紫を打分たる下緒寛う上下げ、月代のあを青く、大束ねの髷ふ濃油のつめ髪、その爲ふ少し釣りて凛々しき眼元、鼻の高きと、二ツ合せく賤しからぬ顔。細造りまして すべて花者なる中ふ、自ら武士らしき處を失はぞ、誰が目にも殿様。よしや弦をきてあるかうとも、御落胤ふ疑ひなし。

庭下駄の音を立てゝと、飛石を除て忍びよりしあれば、後ユ此人ありとも知らぜ。

其を幸ひに何ら惡戯して見むと、暫時立ちーが、何を思ひついたか。無理に笑ひを忍び、下緒の端を、そつとお桂のぬき衣紋の間にさしいれく震はせば、

――蟲ら（あワ）

といひ、掻拂ふ機會、濡手の雫を颯と面へ、これい時なら ぬ時雨。不思一足ゞがつて

（えエ冷さい）

聲丹見上れば若殿ふれば、

（れや御免遊ばしまし、ちつとも存じませんでした）

（なゝ知つて居おから）

（あれあんな事を、お人ぢゐるい）

（れ人のゐるい）

鵲鵲ふ口真似さまて、お桂は籠をとんと叩けば、雪之助い笑ひ出し。仕掛し口調

もこれゝ消され、ちべらくい挨拶なし。　お桂は籠を拭おから

（若様）

（何だ）

（今朝ねとはまだれ稽古ゝお出遊ばしませんの）

（今日ゝ頭痛がしてならんからの）

いふ顔を見上おて、

（梅干をつけてれ上申しませうか）

心附て言てくれるものと、

（きさおらしいろんを物を）

（其ではあおた治ることては御座いません）

（治らぬ方が勝手さ、明日も稽古を休む）

（まア……孩児のやうな事を）

（自分もよく孩児のやうなことを言ふくせゝ）

れ桂は片頬を笑まして、

（わたくしも孩児で御座います）

（おれも孩児だ）

（孩児同士で中よく致しませう）

（これほど中がよければよいではないか、先刻探したゞ何處ゝ居た

（お末ゝお尋ね遊ばしましたか）

雪之助い立草臥れて其處ゝ腰を屈め、ひあとお桂ゝ寄添ひ、

（尋ねさ）

開くと眼を見張て

（えゝ）

（其がどう致した）

（どう致したでか御座いません、お末は存じて居りませよ）

（知つて居くもよいていないか）

無頓着な心を恨めしく思ふか、聲の調子かいりて

（よろしい事は御座ありません）

（おるゐどお前はいやかも知れん、おれはいい、）

かういはれて見れば、また惡くもなく、

（またそんな事をおつしやります、もしこれが殿様に知れましたらどう致さう

かと、此頃はそれが心配でありません）

（何知れるものか）

これこれもふ知れぬといふ譯もきうせを、いつも氣休めの一時言葉。男は掛念す

べき事をきへ、掛念せぬ大膽の處あり。　女はまさ其よも及ばぬを、内氣過て

の物案じ。盥の中へ兩手をついて、覗ぐ姿を見れば、見ほど流石にわが戀人。う

、る姿を。妻れさせやうを、肥らせやうと、わが思ふまゝになるかと思へば、そう

恐ろしき冥加、われながら我身が難有し。　少し愁ふ沈む風情のまほらしさ

は、似たりや、其處ら咲亂る、常夏、幼稚どみる中ゐ何處やら色を含む姿。——

かぶりつきたく、思はをきし出を手を、お袖の顧へうけ、顔をこつちゝ引向けん

とほれば、くすぐつたがりて首を縮め、そづ、のーがりて横をむく、手を引けば顔

をこちらゐして何をいたづらおといそぬばうりの眼元。雪之助と何も言はを、ゐ

が眼ゐ心を籠めて見詰しが

（可愛い眼だのう）

思つたまゝをふつと口走れば、お桂は玩弄ると思ひしか、雪之助の膝を打たむと して……濡手。また盥へ入れ

（たんとおッきやいまし）

奥ゴ時計の音凄まじく、數ふれば

（オヤ四ツて御坐いますね。殿様も今ゴお歸りゴをりませう）

（もうお歸りだらう。また暫らく思ふ様にゝ逢れない）

（それが何よりつらう御座いまを）

悲しい聲でいへば、雪之助もよき心持はせず。

（もう四五日留守だと……）

（四五日も四五十年も百年もれ留守にしてほしうございまを）

鵬鵡がまた口真似をおかける時、玄關遠ゴ騒かしく（お歸り）と高く一聲。

南無三……二人は狼狽え、この聲が鼠……雷……連理木は真中から引裂たり

四の巻　後編裝ゴむらりづん

狩場ゴあかも二夜ゝ、妻の夢にまゞ〳〵驚き、曉近く草枕の露さへ、われゴ濡れるものをと、下紐のかたくなる一葉恨めしく、晝ゝ山深く狩暮し、馬も疲れて おのづや足を留むる、谷河の流ゴ臨めば、これすら淺瀬ありて底のしれるものを と、見るものふつゝその事氣ゴおりゝ、騎射ゝ達人の名聲ある平馬が、此度れ狩に限りて、不思議ゴも仇矢多く、勝誇るべき獲物をれを、勢子ども導じて心ゝ家路ゴ逸る箭竹の、的が違へばと、兎乃足を縛りながら笑ひ々る。

是までゴ幽しがつて歸りしに、一葉ゝ無事を祝賀の挨拶にさへ顔を見せねば、野太刀と解さうけ（奥ゝ）と額の青隈見るより、お桂ゝ恐れて聲をふるゝせ

（昨日のらの御病氣、お食事も遊ばしません）

凝たる痞癪も、病氣と聞いて衰憐ゴ溶され、面色までがれのづと和ぎ、

（左様か）　と答流し、づゝ〳〵一葉の寢屋ゴ行き

（（今歸宅した））

一葉は眼を閉ぢしまゝ寢返りして、顏を向ふをれば、

（（今歸宅した））

重ねて言ひ懸られ。

（（お歸り遊ばしまし））

顏を此方へ向けるでもなく、いやでいやでおらねど、義理ゆゑ一といふが、調子一知れた挨拶。恨めしいとも思はず――思はぬでもなけれど、一葉の美色一目見ると、堅いだけ碎け易き武骨心、他愛なく成り、天下一主君もなく我身もなく、唯是ばかりに諸事を忘るれば、一葉が言葉につれなくても、やさしくても、其は論なし。其唇に觸れし音聲――其胸が釀せし音聲は、無二の妙音に響きて、寒胃がするほどの喜悅。

（（氣分はどうぢや。藥を飲んければいかん））

（（はい））　この一句の裏にある意味は。早くゆゝがし。多く言葉を替すもうるさし。

今一葉は想像み、田鶴彌樣お、縫てあげさき袴の地色縞から、どんなのが似合ふの――是でもおし、其でもおし、撰好みして居る處を、えゝ邪魔を平馬面、歸つて來ぢともなり。山一よい馬の爪づく木根岩角はおかりしか。涙にはふみ外も掛橋はおいものゝと、假初にもかく思ふは鬼ゝし。なるほどいやなるべし、厭惡には相違あるまじけれど、罪も恨もなき……のみか、慕ふてくれ人を、死ねがしとの心底、情なくも恐ろし。　ゝ、る一葉までにあらざるども、戀は一方一弱く、一方一強く、わが好人一は命を捨ても添ひたく、さらふ男は命を捨でゝも嫌ふが常なり。

病氣と聞て御機嫌直りし顏色なりしが、つか〳〵與樣の寢間へゆかれたは、もしやとお桂氣遣ひて、襖の外まで踪をつけ、内をのぞけば子細もお妃模樣。

（（殿樣お召替を））

と促せば、後にと一葉言遣して、平馬はわが部屋へ引還し、衣裳を更め、夕餉の膳に向ひしが、今日の飯は小砂利を炊ぎし物か、いかみしても咽喉へ通らず。たゞ式のとく箸を持ちしばかりに済まして、再び一葉の寝屋へ行きし。　此時は

いかなる物語せしか、知る人なけれど、恐らくは十符の皆紙、これを三符にと平馬が逼りしを、一葉が艶もなき言葉を放ちたるにやあらむ。　襖荒らゐ

引あ不、畳さえも穏かならず、監守にれ女たる鸚鵡籠を右手にして、部屋へにゆかず、己が寝屋へいりぬ。

枕一ツの床に寝よとの鐘の音無情をつげて、夜は更初め、家内漸く静まるを待構へ、蒲團の上に寝もやらず、折々四邊を見廻し、小首を傾け、耳を澄すは、一物胸ふありて、その成就の時刻を量るか。　衝と立て屏風の陰より、かの鳥籠を持来て枕邊に据え、おのれは舊の座に居直り、二ツ三ツ籠を叩けば、物言へと常に慣せし相闘う、鸚鵡は羽繕ひするみ、扨こそ――聞うむと、呼吸を呑こみ、顔をさきし出す時、聲爽うに、

《おまへは否かも知れむか我はい、……殿様お知れましたらどう致さう》

ぶツ。　留守の相引、今は偽なきに極ゐる　○扨刀を引掴む時。

《可愛眼だのウ》

えエ舌たるい。　憎い女。

《今にれ歸りふおりませう……また暫く思ふ様には逢はれおい》

思ふ様に。　留守のみと思ひしに、我目をさへ眩ませしか。　へ幽用捨にならず。

鞘を反せて、柄も砕けよと握り、歯切をして鳥につめ寄きば。

《留守だ。　四五日留守だ……四五十年も百年もお留守……何知れるものか》

知らしてくれむ。　と踏出す左足の力に任せて、鳥籠を蹴倒し、襖も障子もあたるを邪魔と、蹴返し踐越え、暴に暴れたる阿修羅王。　無二無三に一葉が寝間へ躍込めば、戀にせめられて、まだ寝もやらぬ一葉は、與の方の物音に、何事と起返

る間もあらせぢ、其音は此方へ近づく……驚破と思ふ暇へ推寄る……猥藉者。有明燈の薄あかりに顔を見合せ、あが夫ふり。

（（やア））

（（おのれ））

（（あッ））

後袈裟にぱらりづん。切先屏風へ餘り、墨繪の松枝を折られぬ。

やまと昭君終

明治二十二年八月二十日印刷
明治二十二年八月廿四日出版

定價金十錢

著述者　尾崎德太郎
翻町區飯田町五丁目廿三番地

發行者　吉岡哲太郎
神田區南乘物町三番地

印刷者　田口高朗
神田區今川小路三丁目一番地

發賣所　東京神田區南乘物町
吉岡書籍店

版權所有

国立国会図書館

妹背貝　連山人

何れも一冊十二錢郵税二錢ツヽ

柳浪子新著

花の命

全

定價十錢
郵税四錢

特71
654

301229-000-7

特71-654

やまと昭君

尾崎 德太郎／著

M22

DBB-0024